

シベリア抑留

島根県 高尾 和良

(旧姓 坂田)

出生から入隊

私は、合併前の飯石村で祖母、両親、姉兄の家族の二男として生まれ、尋常高等小学校を卒業し、鐘紡防府工場に勤務。昭和十七年四月より一カ年、神戸市の鐘紡理工科講習所を修了し、防府工場の実験室に勤務。昭和十九年四月、陸軍特別幹部候補生として三重県鈴鹿市、中部一三一部隊（航空氣象第一連隊）に入隊した。

第一期生のためか、軍服など一切新品で、銃も九九式短小銃であった。七月まで教育を受け、八月に新京の第二氣象連隊に転属。同日同じ新京の特別通信教育隊に転出。昭和二十年五月原隊（第二氣象連隊）に復帰、通信業務に従事する。

ソ連軍の侵攻からシベリアへの旅

たまたま勤務中にソ連の参戦を知り驚いた。

その後、私の交信相手は送信してこなくなった（ソ連の侵攻が早く温春より敦化に移駐したので、送信が出来なくなり）。八月十五日、正午に重大な放送があるからと全員宮庭に集合、玉音放送を聞いた。その後部隊長が「軽挙妄動するな」その一言で解散した。

八月二十日に四平街に集結、八月三十日ごろ四平街を貨車で出発。黒河を渡りプラグエシチェンスクより二段貨車に詰め込まれ移動した。

初めはだれもウラジオストクに出て帰国するものと思っていたが、貨車の小さな窓より太陽の出る方向を見ると貨車は西の方に進んでいる。これは大変だと、一時はだれも茫然となり声を発する者もいなかった。その間貨車は西進するのみであり、私ら若い者はなるようになるかと、半ばあきらめというか、開き直った状態であった。

十月二日ごろと思う。イルクーツクの第二收容所に到着した。

この収容所に到着一番、部隊長の言われた言葉は、今も時々思い出し、懐かしさと同時に当時の身の引き締まりを思い出す。「本日より我々は、ソ連衆人環視の中での行動については日本人としての品位を失う行動を絶対にするな、部隊長は当地で骨を埋めても、貴様ら全員内地に帰すよう努力するから頑張ってくれ」、この一言は生涯忘れることはないと思う。

抑留生活の実態

この収容所は既存の建物で、収容人員は二十人くらいと思うが、詳細は不明。中はほとんど二段式で板敷で、何も無い。電気、暖房（ペーチカ）は一応完備していた。作業は各所属により種々で、他の人のことはあまり知らない。当初は木炭自動車の薪の生産の仕事で、ノルマなどは聞いたことがない。ときたま夜中に貨車から石炭下ろしに出役させられた。

昭和二十一年二月ごろから半年くらいたったと思うが、突然炊事の応援に行かせられた。

ここで給食について述べると、一日に黒パン三百グラム（これはどこも同じと思う）、雑穀、野菜、魚、

肉、砂糖などそれぞれ規定の量があり、我らの収容所では雑穀（量については忘れた、以下同じ）は、燕麦を主とした麦類、野菜はキャベツ、馬鈴薯、魚は鮭、鱒（日により異なる）を一緒に大釜で雑炊した固めのものを各食事時間に配食する方法がとられていた。十分とはいえないが、他の収容所から帰られた人の話では、かなり恵まれていたようである。これも、前述の部隊長が絶えずソ連の幹部と話し合いされたのが大きいと思う。

二十一年十一月十日と思う。作業成績優秀というところで七十キロ奥地のマルタに移動。ここでは、私たちの燃料、食糧の提供を受けるコルホーズ（農場）の要請があれば応援に出動することで、ほとんど休養していた。この収容所では今までの黒パンから白パンに変わった。

昭和二十二年三月三十一日に急に移動命令により、四月一日貨車に乗りナホトカに四月十三日の夜到着した。その翌日だと思う。ソ連の収容所長が全員を集合せ、今より二カ月後から作業成績優秀のグループか

ら日本に送還すると発表した。奥地で優秀の折り紙つきで来たのに今さらノルマを落とすようなことはできないと、グループで種々検討して、他のグループに劣らない成績を維持した。

帰還とその後

そうこうするうちに収容所長の発言の二カ月がきた。六月十五日の夕食になっても何の音さたもない。まだまされたのかと就寝していると、十二時ごろだと思ふ、幕舎に二、三人が入り「皆聞け、ダモイの発表をする」と大きな南大尉の声がした。幕舎は俄かに「ドヨメキ」が起こり、また静寂になった。だれもが聞き漏らすまいと、本当にそのときの状況は筆舌に表わすことができない。

私らのグループは全員ダモイと発表された。

二日ばかり二つの収容所を移動、演劇、民主教育のようなことを聞かされたが、心は既に故国にあり、モットモ、モットモの程度で平穩に帰国船第一大拓丸に乗船。船内は何もなく、昭和二十二年六月十八日に舞鶴に上陸した。

帰国後、十月に村役場に就職。二十六年に高尾家に養子に入り、退職後、畑に汗を流しながら、公民館、学校建築期成同盟会などの事務局を終え、現在寿会（老人クラブ）の事務局で日夜を過ごしている。

明暗十年の旅路

石川県 伊藤 鍊二郎

大学を出て、郷里石川県の土木部で技手として二十一年近く勤めていた私は、昭和十五年（一九四〇年）、満州国へ長期出向を命ぜられた。

当時、建国間もない満州国は国土広大、資源も豊潤ここに「王道楽土」を建設すべく、軍官民協力して理想の具現に情熱を傾けていた。私ども一行六十人は、政府の各部署に配置され、基礎講義を受けた後、実務に就くことになった。

私は交通部（日本の運輸、建設省に当たる）の技師として、いよいよ現地に向かった。振り出しは北満の